言心先生の中国便り

視覚以外の感覚

まず、ひとつクイズを出す。迷宮のような宿舎で、ある夜突然、漏電による火事が発生した。真っ暗な中、殆どの人が、死傷したが、ただ一人、無傷で、難から脱した。この人は、どういう人間であるか？

回答は、盲人である。盲目の人は、日常生活で光に頼らない。視覚以外の感覚は、普通の人より遥かに優れている。緊急事態の場合、盲人が、普通の人より、俊敏的に無事に逃れるのは、当然である。

最近、世界の媒体で、一人の盲人が、超有名人になった。この人は、中国山東省東師古村の陳光誠氏である。彼は、幼い頃高熱のせいで盲目になり、良い教育も受けず、二十歳まで文盲であった。以後、彼は点字を覚え、法律知識も独学した。中国農村幹部は、国の「一人っ子」政策を執行する為、無断で村人の家に入り、罰金、家具の損害、人工中絶等の蛮行をすることは、日常茶飯事である。陳氏は、違和感を覚え、無償で被害の村人を法律面で応援し、違法行為と対峙する。しかし、陳氏の人権活動は、地方官僚の逆鱗に触れて、彼に4年3ヶ月の牢獄生活を過ごさせた。

出獄後、陳氏は初心を変えず、人権活動を続けた。現地の政府は、陳氏を軟禁する為、二十数人を雇い、24時間で監視し、今まで一億円以上の費用を掛けてきた。

4月22日夜、陳氏は、二ヶ月の細心の準備の上、監視された家から出た。障害物を超え、川を渡り、何回も転倒した末、必死に監視から脱した。彼は、雑草の中、密かに人権組織に携帯で連絡を取った。南京市在住の一人の女性人権活動家は、車で陳氏を迎えに来た。数日後、陳氏は彼にとって唯一の安全な場所――北京のアメリカ大使館に逃げ込んだ。これは、中国人の陳氏にとって、本当に皮肉なことかもしれない。

事件後、米中両国の外交官が、陳氏の去就について協議した。陳氏は、米大使館から出て、怪我と病気を治療する為、北京市内の病院で滞在する。彼の希望は、渡米して、アメリカの大学で法律を勉強したいと言うことである。

陳氏は、視覚以外の感覚が、普通の人以上である。彼の目の前は暗いかもしれないが、心の中はとても明るく、温かく、弱者に対して、自己犠牲して応援する。正義を実現する為、野蛮な権力者に対して、全力で挑戦する。長い間、陳氏と彼の家族が、想像以上の苦難を乗り切り、莫大な犠牲も支払った。

心から、「本当にお疲れ様！」と言いたい。